

武蔵、国衙と守護所、守護所の事例)  
第五章 幕府から鎌倉府へ(得宗専制と鎌倉の政治、街の景観、幕府の滅亡、鎌倉府成立)

あとがき

(四六判 三二六頁 一九七六年一月)

柳原書店 一七〇〇巴)

(杉橋隆夫 立命館大学助教授)

## 米原章三伝刊行会編

### 『米原章三伝』

米原章三(一八八三—一九六七)は戦前・戦後の鳥取県政財界の牛耳をとり、その指導者として県下に君臨しつづけた実力者であった。本書はその死を追悼し、その業績を記念するために編まれた伝記である。

しかし通例みられるような顕彰本の類とは少々趣きを異にしており、米原という地方政財界の要に位置する人物をとおして描かれた一編の鳥取県近現代史、とよぶにたる内容を本書は具えている。ことに壮年期を記述した各章(第三—第七章)は、二〇—三〇年代の政治史に関心を有する者の興味を多にひくことと思われる。章三が養子

に入った米原家は県下でも有数の大山林地主であり、県会議員をも出す典型的な地方名望家の家であった。若くしてこの米原家の家長となった章三が、いかにして「県下政治経済界の統合者」と呼ばれるまでに成長していったのか。これがいわば本書の核心をなす問題にあたるわけであるが、私信などを交えた叙述はかなり明快にその過程を描きだしており、説得力に富むものといえる。とくに興味をそそられた点を紹介しておきたい。

鳥取の憲政会は第15回総選挙(一九二四年)で定数4を独占する大勝利を収めた(米原は支部幹事として采配をふるった)が、本書はその原因を、元来は地主層を中心としてきた同会が新たに抬頭してきた都市中小商工業者層の支持をうまく把握しえたことと求めている。米原は、彼自身は地主ではあったが、政友会と対抗するために「非政友中間層の力を利用し、これを憲政会の傘下におさめること」が是非とも必要であると考え、この戦略を率先して実践に移し、それによって党のリーダーとしての位置を確固としたものにしていったのである。同派が中間層の支持を吸収する軸と

なったのはいうまでもなく普選のスローガンであった。かかる憲政会の変化はたんに鳥取だけのものではなく、広く全国的な現象だと考えられるだけに、本書の示すケースはかなりの一般性をもつといってよいだろう。そのほかこれに関連して鋭い指摘だと思っただのは、米原のなかにある地主的利害と憲政会領袖としての一般的利害との矛盾が、国政レベルでは普選を要求しながらも町村レベルでは二級選挙制の存置を望むといった矛盾した言動となってあらわれたという点や、民政党支部の構造が大地主層と都市部中小商工業者・インテリ層との同盟という性格をもっており、その両者は米原という存在によって媒介されていたという点などである。

さらに興味深いのは次のような部分であろう。それは、二〇年代からの経済恐慌が県下の有力地主(彼らは日露戦争前後から企業活動に力を入れ、地方財界を形成していた)の経済的基盤を動揺させ、その事業の統合整理・資本の集中を余儀なくさせた。その結果、それまで政友・民政にわかれて対立しあっていた彼等が次第に党派的对立を解消し、協同して経済的利益を追求する

道を求めるようになった。「このような動向の中で、卓越した政治力を持つ章三が、政友・民政両派提携の事業の主導的役割を担うように」なり、「県下政治・経済界の統合者」へと昇りつめていった——という叙述である。恐慌が地方政財界にどのような影響を及ぼしたかよく示されているといえるだろう。党派対立が政党を活気づけ、政党内閣への志向を強めるといった時代はもはや過ぎ去ってしまったのである。今や彼らは対立にかわって統合を求めはじめた。そして政民両党の間にさしたるイデオロギ―上の差がない以上、経済的利害の統合は、二大政党の対立そのものをも形骸化する方向に進んでいくはずである。恐慌下における地方政財界の再編成はおそらく鳥取以外でも同様の過程を辿ったものと思われる。若干の印刷ミスが惜しまれるが、いわゆる地方名望家というものが何であったのかを知るうえで、本書は一読に値する書物であると考える。なお同書の執筆は篠村昭二、小谷進、鈴木実の各氏がそれぞれ分担され、徳永職男、松尾尊允、浜崎洋三の三氏が監修にあたられたことを記しておきたい。

(A5判 三五二頁 一九七八年 六月)

米原章三刊行会 (二五〇〇円)  
(永井 和 京都大学大学院生)

### 古代学協会編

### 『西洋古代史論集Ⅲ』

### 古典時代の諸相』

第二次大戦後欧米古代史学界において発表された重要な論文を訳出して、その研究成果を吸収することを目的として編まれた『西洋古代史論集』は、この第三巻をもって一応完結する。先史時代・古代オリエントを扱った第一巻『古代文化の形成と発展』、ギリシアと初期ローマを扱った第二巻『古代国家の展開』の後を受けた本書には、ローマ末期(二編)、ビュザンティオン(一編)、カロリング朝(一編)、古代ロシア(二編)の、計六編の論文が収められている。

第一論文A・モミリアーノ「キリスト教とローマ帝国の衰亡」(秀村欣二訳)は、講義論文集『The Conflict between Paganism and Christianity in the Fourth Century』(Oxford, 1963)の序説として執筆されたものである。従って短いながらも、

博学をもって知られる著者の本領が発揮された論理明晰な好論である。ローマ帝国衰退の要因論諸説を手際よく紹介した後で、教授はローマ帝国の没落とキリスト教の関連性に、今一度注意を喚起する。少なくとも、教会が最優秀者を吸引することによってローマ国家を弱体化したことは事実である。また、教会は帝国西部においては蛮族と交渉をもって、崩壊しつつある帝国に取って代ったが、東部における教会は、蛮族との戦いにおいて帝国を支持した。即ち帝国に対する教会の態度に明らかな地域差が見られることを、著者は指摘する。

第二論文A・H・M・ジョーンズ「ローマ帝国の衰退」(杉村貞臣訳)も、第一論文と同様のテーマを扱っている。著者は、数多いローマ衰退原因論の中から、特に次の三点を取り上げる。第一は心理学的要因で、古典古代社会を支えていた市民精神が衰退すると共に、キリスト教をはじめとする個人的・神秘的宗教が盛んになり、隠遁主義の風潮が広まったことである。第二は経済的要因で、農民層の没落と耕地面積の縮小、及び軍人・官吏・聖職者などの非生産的な人口の増加に伴う「民力の不足」が